人魚と野郎＊石原慎太郎

人魚と野郎

＊　＊　＊

石原慎太郎

集英社

人魚と野郎

一九六五年五月十日印刷
一九六五年五月十五日発行

定価　三六〇円

著者　石原慎太郎
発行者　陶山　巌
印刷者　盛　英信
発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三
振替　東京一五六五三
電話　(二六三)六一一一
印刷所　慶昌堂印刷
著者との了解により検印を廃止いたします。

©1965　乱丁・落丁本はお取替します。

人魚と野郎＊＊＊石原慎太郎

*装幀　宇野亜喜良

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 1

それはいつもの眼覚めとは違っていた。

遠く小鳩のくすぐるような鳴き声が聞こえて来、やがて裏の森の繁みから木つつきがやって来て寝室の横の藤棚で新しい朝を告げ、灯入れされ焦点がやっと合い出した幻灯のスクリーンのように辺りがだんだん蘇って落ちかかった毛布や寝台の足元に隙き間から射し込んだ若い太陽の接吻がはだれた縞を拡げて見せる、いつもの朝とは違っていた。

それは雷の轟きの中におびえて杏子に向かって救けを求める犬の鳴き声でもたらされた。声の主は庭のビッキイだった。

眼が覚めても杏子にはビッキイをおびやかしているその轟きが何なのか見当もつかない。嵐だろうか。それにしては藤棚をゆする風の音も雨の音もなかった。

射しこむ陽の光もない。時刻を計ろうとして森に向かって耳を澄ましてもその轟音にかき消されて他に何も伝わって来ない。

杏子は気づいて枕元の時計をそっと眺めた。四時一寸(ちょっと)すぎだ。随分早い時間だ。昨夜遅くまでカンバスに向かって、寝ついたのは十二時近くだったのに。

それでも四時とはいえ夏の朝はもう明けようとはしている。その気配がカーテンをとざした部屋の内にも感じられる。

杏子は立ち上がり前の庭に向かって開いた窓のカーテンに隙き間を作って覗いて見た。ひどい朝霧だった。

その白い混沌の中から、あの凄い音が聞こえて来る。杏子は睡い眼をこすって覗いて見た。と、森から吹きだすゆるやかな風にのってかすかに流れていく霧が薄れ、その中から兵隊が現われたのだ。兵隊は両手を腰に当て、杏子の方を睨んでいた。

霧にまぎれて定かではないが、杏子にはそんな気がした。

庭の芝生の上に足を踏んばって、兵隊は杏子の家の方を睨み上げている。固そうな黒い制服に黒い手袋、そして白い鉄かぶとをかぶっていた。武器は、と捜しかけた

時、その後から同じようなのがもう一人、現われた。
片方より背が低い、と思ったら、その兵隊が跨っているものに杏子は気づいた。小さな戦車、と思うくらい、大きなオートバイだ。彼がその片手をしぼるように動かす度、少なくともこの山の中では、この世のものとは信じられないくらい大きな音が辺りに轟き渡った。
村からの郵便配達が乗って来るスクーターは見るが、とても同じ種類のものとは思えない。前の男が後ろを手で制すと急に轟音が止まった。エンジンを切ったらしい。
両手を腰に当てたまま、号令をかけるように、
「おーい、誰もいないのか。この野郎、いたら出て来い！」
前の兵隊は家に向かって怒鳴った。とてつもなく大きな声だ。杏子を認めての訳ではないだろうが、覗いている杏子は自分に向かって怒鳴られたような気がし、思わずカーテンの後ろに一歩退った。
「兄貴、どうもいないみたいだぜ」
別の兵隊が言っている。これも大きな声だ。しかし兵隊にしては兄貴などというのはおかしい。
「うん、いないみてえだ」
兄貴が答えて言っている。
兵隊にしてもずいぶん言葉づかいの悪い連中だ、と思う内、
「なにか食いものくらいあるだろう。戸を叩っこわして中へ入って見ようか」
「人がいねえならドアでも引っぱがして火たこうか。すっかり体が冷えちまった」
ぶっそうなことを言っている。
「やなもんだな、この霧って奴は。道には迷わすし濡れて冷たくってよ」
「ウイスキーどうした」
「もうねえよ」
「一壜全部か」
「ああ、空さ、あんなもの全然役にたたねえ」
「ガソリンでも飲んどけ」
「そのガソリンももう心細いぜ」
もう一人の方もオートバイを下りて、二人は寝室の下の居間兼アトリエのテラスに上がって来た。
歩き出した二人にビッキイはすっかり気おされて黙っ

てしまった様子だ。

カーテンから覗く真下を黒びかりした革のジャンパーの広い肩が過ぎて見えなくなると下でがたごと音がし、二人は中を覗いている様子だ。その内に、「へ、兄貴、絵があるぜ。絵描きがいるのかな。どうだいあの絵、よく見えねえが、なんだ、てえしたことなさそうだ」

勝手なことを言っている。

「住んでる奴がいるのかいねえのか、これだけ呼んで出て来ないところを見ると留守だな」

「道に迷った旅のものが踏み込んでも文句は言うめえ。この戸をぶっこわそうか。食いものはありそうだぜ、この様子じゃ」

杏子は慌ててナイトガウンを着込みその上にカーディガンを引っかけた。

寝室を出、階段を下りる時胸がどきどきした。戸を破って踏み込まれでもしたら大変だが、といってうっかり声をかけて一体どんな連中かわかりはしない。

階段に灯をつけ杏子は階段を下り出した。下では二人がガラス戸をがちゃがちゃやっている。

階段を下り切った時、その音が止んだ。下りて来る彼女に気づいたらしい。

誰、と咎めて声をかける前、杏子は思い直し暖炉の鉄の灰かきを一本、片手に握って下げた。

テラスのガラス戸に歩きかかり、また気づき直してスイッチを入れ、アトリエの明りを一杯につけた。悪い連中でも、明るいところでは少しは気がとがめるだろう、と願ってだ。

戸をがたがたやる音は止み、外の声は何か互いにぼそぼそ言い合っている。

大方、矢っ張り人がいたとでも言っているのだろう。

突っ立っている二人の前に立ち、カーテンを一杯に引いて開けた。庭一面の白い朝霧だ。それを背に、黒い大きな男が二人、影みたいに突っ立っている。

杏子はまた一瞬、気がひけた。

「どなた」

懸命に落ち着いた声で言った。

「こんちは」

外の声が返った。

「何です。こんなに早くから」

「もう朝ですよ。小母さん、悪いけどここ開けてくんない」
　言った片方を押しのけて、多分これが兄貴と呼ばれた最初の兵隊だろう。
「すみません、さわがせちまって。道に迷って夜道をぐるぐる廻っている内にここに出ちまいましてね。道を教えて頂けませんか。出来たら何か食わして、いえ、金は払います。それから、あったら電話を借りたいんですけどね」
　言葉は少しは丁寧だが、それでも結構図々しい。
「あなた方どなた。どこからいらしたの」
「僕ら？　選手です」
「選手？」
「ええ、あれの」
　庭に置いた馬みたいなオートバイを顎で指す。
「東京から来てね、競技場へいく途中、軽井沢で友だちのところへ寄って夜向こうを出たら道を間違えて」
「競技場？」
「ええ、浅間のレース場、知ってるでしょ」
「知らないわ」
「知らねえ？　ここらにいて、もぐりじゃねえか」
　弟分の方が言う。
「明後日から試合があるんですよ。世界選手権の日本予選がね」
「この辺りはオートバイには関係ないわ。特にさっきのあの騒音にはね」
「へへどうも。でも朝は早起き、三文の得ってね」
　また言う片方を小突いて、
「すみません。お願い出来ますか」
　そう聞いて眺めたところ言葉には間違いなさそうだ。杏子は観念してガラス戸の鍵を廻して外した。
「あなた方のこと、最初、兵隊さんかと思ったわ」
「兵隊、へ、これぁどうも。兵隊より、少しぁましだ、いや、下かな」
「大きな声」
「ええ、いつもあのエンジンの音の中で話をしなきゃならんのでね」
　それでも、二人は中に入る時、かぶっていたヘルメットを外して脇にかかえ、はいていた長靴を脱いだ。
「へ、案外いい家だな」

お世辞のつもりでか言うが、案外だけ余計だ。
「どうもすみません。昨夜一晩、この霧の中を、山道を迷い迷ってやっと出たところが、ここなんです。初めて見つけた家だったんで飛び込んじまったんですが」
まだきょろきょろ辺りを見廻しながら兄貴の方が言う。
「そう、大変だったのね。寒けりゃその暖炉に火を起こして。今、何か食べるものを作って上げてよ」
言った杏子へ、
「すみません。それから、その灰かき、ちょっとこっちへ渡して。大丈夫です。別に悪いことしやしないから」
言われて杏子はやっと気づき、さっきから用心のために握りつぱなしだった灰かきを赤くなって手渡した。
連中は馴れた手つきですぐに火を起こし、暖をとるように暖炉の前の石畳みのマットにジャンパーのまま横になる。その仕草はまるで自分の家にいるみたいに気も置けずにだ。
奥のキッチンで昨夜の残りのシチューに味と湯を足してレンジにかけ、パンとチーズを切る杏子の耳に、
「金棒なんかぶら下げて、鬼婆あかと思ったら若え女だぜ。面あまだよく見てねえが、寝呆けてた割にぁ美人みてえだったじゃねえか、兄貴」
「しっ、聞こえるぜ」
「かまあねえや、ほめてるんだから」
それでもほめているつもりらしい。
簡単な朝食をしつらえて出た杏子に、すみません、とも言わず黙って飛びかかった。奪うように手にしたものをテーブルに並べ凄い勢いで食べ出したかと思うと、優に、いつもの杏子の朝食の四人分はあると思われる量を、杏子の四分の一の早さであっという間に平らげた。
「おいしかった？」
「かどうかはわからねえ。何しろ昨夜一晩走り廻って何も食ってねえ。まだ何かある？」
「さあ」
言って引き返し、持って出た、壁に吊してあったサラミとレタスを、塩とマヨネーズにまぶしてまたあっと言う前に、もう無い。
「凄いわねえ」
「へへ、凄いでしょう」
片目つむって最後のレタスの一枚を押し込むと、

「ああ、これで人心地ついた。全く感謝。こんなところにこんな人がいてくれるとは」
「それはこっちの言うことよ。こんな朝に、こんな人が来るなんて」
「申し遅れました。僕、片倉譲介。こいつあ」
「大貫三次ってんで」
「あなたの弟分」
「いや、助手と弟子です」
「弟子？」
「そう、これのね」
　両手でハンドルを握る真似をし、三次は唇を震わせて爆音の真似をして見せた。
「小母さん、じゃねえ、その」
「私、島野杏子です。まだ小母さんじゃないつもりですけど、この家の主人です」
「どうも失礼。こいつ、どうも時と場所の見さかいがつかないで」
　とは言うが自分だって同じようなものだ。
　しかし二人は朝食をすませて気が落ちついたせいか、前よりがさがさしたところがなくなった。
「とにかく、その、島野杏子さん、明後日、レース場にレースを見においでよ。兄貴が突っ走るところを見てごらん。そりゃ凄えよ。浅間の爆発なんてものじゃねえ。もろに凄え。兄貴は天才的なライダーでね。本当さ。鮮かなもんだ、スピンのカーヴをだだだっ、とこうハンドルを切って、こう」
「おい、うるせえよ」
　譲介にたしなめられて黙ったが、代わりに、
「本当によかったら来て下さい。お礼に、と言っちゃなんだが、一番いい席を用意しておきます。面白いもんですよ。でも興味ありませんか」
「興味あるないって、私、まだ見たこともないわ」
「百聞一見にしかず」
　三次がすかさず言う。
「ここがどこかまだわからんけど、その気がありゃ、こいつにでも迎えに来させます」
「ええ、有りがとう。考えて見るわ」
「それより、あなたはここで何をしているんです」
「ごらんの通りよ。住んでいるのよ」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「一人で」
「ええ、一人で。不自由なしに」
「へえ」
本気にしない顔で言った。
「でも、言っちゃなんだが、まだ若いんでしょう」
「さあ、そのつもりよ」
咎めるように見返してやったつもりだが相手は平気で逆に確かめるみたいにじろじろ眺める。
相手がそんなだからそんな受け応えをしているが、思い直すと杏子は今まで自分がこんな風に話したことを覚えていない。第一、こんな目にあったのも生まれて初めてだ。今の今し方まで彼女の廻りにはタイプはどうであれ、若い男がこんなに間近くいることなどなかった。
「ここに住んで何してるんです」
「絵を描いたり、本を読んだり、時々詩を作ったり」
「はあ、あんた金持ちなんだな」
「そうでなくってよ。私にあるのはこの家っきり」
「でよく食ってけるね」
「ええ、それに間に合うだけのお金は東京の祖父が送ってくれることになっているの」
「ふうん。結構な身分だな」
怠けものだと言うように三次は言った。それがしゃくで、
「私、自分一人でも食べていけてよ。私の絵、時々、誰か気まぐれな買い手もついてよ」
「この絵がねえ」
言う三次を譲介が蹴とばした。
「それに、私自分の食べるものを、自分で作ってよ、お野菜も」
「ははあ」
余り感心しない調子で相槌を打つ。
「で、どこへも出て行かないんですか」
「ええ、どこへも。私ここが好き。都会は疲れるだけ。それに、私ずっと前体をこわしてから、都会が怖くなったの。冬、雪でも降れば、半月でも、一月でも、誰も来ないまま一人でここにいてよ」
「犬を相手に」
「ええ、だけじゃなし、いろんな小鳥、いろんな獣、熊だってせんには来たわ」
「仙人だね」

全然感心しない顔で二人は同時に同じことを言った。
「ま、人はそれぞれ生き方があるさ。俺たちのやってる仕事だって、他人から見りゃまともじゃねえ。気狂いって言われても仕方がない」
「兄貴そんなことを言っちゃいけねえ。俺たちのやっていることは、今に世界に認められて――」
「うるせえな。それより少し寝ろ」
譲介に小突かれて三次は頷くとそのままま火の燃えた暖炉の側に横になった。
「すみません、少し寝かして下さい。全然寝てないんで。誰か来てここにいるのが迷惑になったらかまわず起こして下さい」
断わる間もなく、譲介も三次と交叉して足を延ばすと、ヘルメットを枕にすぐにいびきをかき出した。
大きな黒いまきみたいに転がったきり動かぬ二人を見下ろし、改めて杏子は肩をすくめた。
兵隊ではなかったようだが、いずれにしてもこの二人の来訪は杏子の一人いるこの山荘にとっては革命的な事件には違いなかった。
寝返りのはずみにヘルメットから頭が外れ、頭がごつんと鈍い音を立てて石畳に落ちても、三次は一寸薄眼を開いたきりそのままま平気でいびきを立てている。
眺めたところ、譲介は二十四、五歳、三次はその少し下、三次の方がちょっと背が低く、代わりに幅が広い。譲介は五尺七、八寸あろうか。いずれにしろ二人とも真黒に陽焼けし、着ている黒い革ジャンパーのせいだけではなく、見るからがっしりして見える。少し開いた唇からすいて見える歯はあどけないくらい真白で綺麗だが、二人とも顔中にあちこち小さな傷痕があった。就中、ほりの深い譲介の右のこめかみから右横顎にかけて長い傷の痕がある。凄味と言えば凄味だ。その傷を見直して杏子はまた少し不安になった。
二人急に殖えた居候を置いて絵を描く気にもなれず、片づけものをすると杏子はビッキイを連れて散歩に出た。
まさか居ない内に二人が眼をさまし、ものを盗んで逃げ出すとは思えない。二人を眺めてそんな風な確信はあった。
迷ったと言いながら、詳しい場所も聞かずに食べるだけ食べて寝てしまうところは呑気、と言うか矢っ張り言

った以上に疲れているのだろう。
　ずっと下の部落まで下りていき、昼食と夕食のための買いものをした。二人は多分昼食も欲しがるだろう。余計なことかも知れないが、ここまで来た以上はそれくらいはしてやってもいいような気もし、その分も買った。店屋のおかみさんに、
「お客さまですか？」
　尋ねられ、
「ええ」
　と答えた後、そんな買い物をしながら何とはなし気持の弾んでいる自分を杏子は感じていた。考えて見ると、一年に数える程しか訪ねて来る人のいない暮らしだ。馴れたとは言え寂しさもある。
　あんな招かざる客でも、話して見ると結構気がまぎれている自分を見、杏子は漠然とここ数年いったことのない東京を思い出していた。
　村からの帰り道、から松の間をぬける山荘への坂道を上りかけた時、後から走って来る人の足音を聞いた。いぶかって振り返る杏子の前に見知らぬ男が二人姿を現わした。
「もしもし、ちょっとおうかがいしますが」
「なんでしょう」
　答える杏子を二人は急に黙ったままじろじろ眺め渡す。その二人の眼が、今朝方、家へ突然現われてぶしつけに彼女を眺め廻したあのオートバイの二人とは全く違ったものであるのを杏子は本能的に感じていた。
　二人の眼の光に、何故かは知れぬがいやしく、そして相手を窺って計るような油断出来ぬ影があった。
　杏子の前で二人は小さく頷き合い、
「失礼ですが、あなたはもしかしたら島野杏子さんではありませんか」
「実は、私ら島野さんをお訪ねして参ったものですがね」
「ええ、私ですが」
「そうか、そりゃよかった」
「何の御用でしょう」
「実は東京から参ったものですが、折り入っての御相談が」
「何の御相談でしょう」

話の様子では絵に関係のあることではなさそうだ。
「失礼ですがお宅にお邪魔した上でゆっくり持参した書類もご覧願って」
「書類って、何ののでしょう」
「まあまあ」
相手は含み笑いで手で制した。
「時に、お宅には勿論あなたお一人でしょうな」
「いいえ、お客があります」
「客！　客がいるのですか」
相手はにわかに慌てた表情になった。
「まさか――」
一人が一人に口走り、
「あの、お友達ですか」
「ええ」
「ただのお友達で？」
「どうしてですか？」
「いや、なるたけ他人の耳には入れぬにこしたことのないお話で」
「私には何だかわかりませんわ」
かまわず先へ歩きかかる彼女のそでを捉まえるように、
「歩きながらお話ししましょう。大まかな話の内容を。失礼、私らこういうものです」
出して渡した名刺に、
中央鉱業　矢島知吉
弁護士　阿部隆三　とある。
「なんの御用で？」
「実は、あなたが近々御相続になる財産についての、特にその中の、山地についての御相談でしてね」
「私が継ぐ財産ですって、そんなものありはしませんわ」
「いえ、それがあるんです」
「どこに」
「ですからその山が、蓼科（たでしな）の近くに」
「蓼科？」
「ええ、あなたの御祖父さまの土地です」
「でも、祖父がどうして。だってまだ祖父は」
「それがもう長くない」
「長くない？」
「ええ、御存知じゃないのですか、ずっと具合がお悪く

って、もう多分、今月一杯。いや、或いは今頃」
「今頃！」
「そう、今頃はもうあなたは御祖父さまの遺産を相続なさっているかも知れませんな」
「祖父が！」
杏子は手にしたものを危うくとり落としそうになりながら、その場へ立ちつくした。
「そう、お聞きではない、何も？」
「ええ、私、祖父とはまだ一度も会ったことがございませんでした」

## 2

杏子の祖父藤岡総二郎は人も知る実業界の偉材で、杏子の曽祖父に当る藤岡荘一伯爵が創立した藤岡産業を、荘一が死んで継ぐやその辣腕にものを言わせて一代の内にその倍の倍に育て戦前から戦中満洲の豊富な資源を足場に隆盛を極めた藤岡コンツェルンに仕上げ、戦中は商工大臣もつとめた実業家だった。
戦後財閥は解体されたとはいえ、戦後追放が解除されるや老齢をかえり見ず一線に返り咲き、その手腕をもって戦前戦中の面影なかった藤岡産業を昔日に近い繁栄に蘇らせ、第二コンツェルンと言われるまでのものを築き直した。
今は会長におさまり、四人いる実子がそれぞれ各部門を継いで指揮をとっているが、その陰では矢張り総二郎の実権というものは全会社に睨みをきかせていた。
その彼がこの二、三年、院政などと陰口言われながら

力をふるった会長の椅子からの号令を止めて、そのため会社全体が第三者の眼から見ても以前あったエネルギーをなんとはなし喪ってきたのは、とみに衰えた総二郎自身の健康に原因があった。後を継いだ息子たちの力量のことをとやかく言われてはいるが、総二郎に比べて見れば、誰もがまだ見劣りするのは無理ないとも言えただろう。

その程度までのことは杏子とて、新聞や何やで眼にし、噂に聞いて知ってはいる。しかしその祖父が明日明後日の命も知れぬ危さにいることは夢にも知らなかった。

大体、彼女の周りの人間は、杏子が藤岡家と関りあるなどということは知りはしない。そのことは杏子一人が知っていることだ。

そして見知らぬ不意の来訪者に言ったように、杏子はその祖父と一度も会ったことがなかった。

杏子の父、雅之は総二郎の長男だった。子供の頃から聡明で総二郎は子供たちの中で誰よりも雅之に期待し、自分の仕事を総てまかすことが出来るのは雅之一人だと思っていたが、その雅之はヨーロッパへ留学中、同じように向こうで音楽を勉強していたピアニストと恋に陥ちた。

総二郎に結婚の許しを求めてきた雅之に総二郎は火のように怒り、そんな関係を絶ってすぐさま日本へ帰るように命令した。

そのピアニスト、島野久美が大正のある文豪の私生児であるということが二人の仲を許さぬ表だっての理由だったが、実際は総二郎の会社を着実に発展させるための政略的な目的をそなえて時の重臣竹園忠好の娘と雅之との縁組を総二郎が工作していたことにあった。

そこまであかして、藤岡家全体の繁栄のためにも父の言う事に従って帰国するように説いた総二郎へ、雅之はウィーンからはっきり拒絶の返事を送ってよこした。その手紙にはすでに行われた島野久美との結婚の証明書の写しが添えられてあった。

激怒した総二郎は、折り返し雅之の絶縁勘当を言い渡したのだ。

今まで送られていた留学費は一切止められ、雅之と久美の幸せではあったが苦しい生活が始まっていった。総二郎は日本にいる親しい友だちからの紹介で翻訳や通訳



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com